

2020年11月5日  
株式会社 TBSテレビ

## 放送倫理検証委員会決定後の取り組みについて

当社は2020年8月4日、貴委員会決定第37号「TBSテレビ『クレイジージャーニー』『爬虫類ハンター』企画に関する意見」において「放送倫理違反があった」という判断を受けました。本件放送について、貴委員会は意見書で「視聴者との約束を裏切るもの」「現場の状況に応じて、柔軟に変更する知恵と勇気』を見失っていた」と指摘しました。当社は、その判断を真摯に受け止めております。

以下、意見書の通知を受けた当社の対応と取り組みについて報告いたします。

### 1. 委員会決定に伴う放送対応

当社は8月4日の委員会による決定通知を受け、当日夕方のニュース番組「Nスタ」、夜のニュース番組「ニュース23」内で決定の内容を伝えるとともに、当社のコメントを放送しました。いずれも全国ネットのニュースです。また、このニュースはCS放送「TBS NEWS」で計10回放送したほか、インターネットニュース「TBS NEWS」に8月4日から8月12日まで、9日間掲載しました。

#### (放送したニュース原稿)

TBSテレビの番組「クレイジージャーニー」の「爬虫類ハンター」企画で、事前に用意したトカゲなどをその場で発見、捕獲したように放送していた問題で、BPO放送倫理・番組向上機構は「放送倫理違反があった」との意見書を公表しました。問題の放送は、去年8月の「クレイジージャーニー」「爬虫類ハンター」シリーズのメキシコ編です。番組では日本の爬虫類専門家が現地で野生動物を発見し、捕獲するシーンを放送しましたが、実際には、放送で紹介した動物のうち4種類について、現地の協力者が事前に用意した動物を現場に置いた上で捕獲シーンを撮影していました。この放送についてBPOは「バラエティ番組に位置付けられるとはいえ、事実上依拠した番組」だったと指摘、「多くの視聴者との約束を裏切るものであった」との判断を示し、「放送倫理違反があった」と結論付けています。これに対し、TBSテレビは「BPOの意見書でご指摘いただいたことを真摯に受け止めます。今後も番組制作についての改革を進め、視聴者のみなさまの信頼回復に努めてまいります」とコメントしています。

また、2020年8月9日に放送した番組「TBSレビュー」にて、今回の委員会決定について放送しました。コンテンツ制作局(旧制作局)バラエティ制作一部長が出演し、決定の受け止め、再発防止の取り組みについて説明しました。番組に出演した有識者は「今回のことを受け、再発防止を徹底し、新しい『クレイジージャ

ーニー』を続けていってほしかった。視聴者も望んでいたのではないか」「ディレクターの孤立化、コミュニケーションの不足が現場で起こっているのではないかと、この意見書は問いかけているように思う」などコメントしました。

## 2. コンテンツ制作局内での取り組み

### (1) 委員会決定の社内周知

本件番組を制作したコンテンツ制作局では、委員会決定の内容について、部会やプロデューサー全員が集まるプロデューサー会議、考査担当者が集まる考査会議、そして各番組会議で、全てのコンテンツ制作局社員と外部の制作スタッフに委員会決定の内容を説明し、出席者全員が意見書を精読しました。

### (2) バラエティ番組プロデューサーからの提言

コンテンツ制作局では、バラエティ部門の全プロデューサーを対象に書面によるアンケートを行い、意見書をどのように受け止めたか、また、再発防止のために自分ならどうするかについて聴き取りました。寄せられた受け止めや提言は様々で、プロデューサー全員がこれらを互いに読み込むことで、仲間が抱えている現状認識や危機感を共有しました。

以下、アンケートで出た主な意見を紹介します。

<本件およびBPOの意見書をどう受け止めたか>

#### 【概括】

- ・今回の一件は「今のルール」を逸脱するもの。ここまで大きな事態に発展してしまうこともありうるのだと、改めて認識できた。BPOのメッセージを受け止め、時代に合った番組作りを続けることが私たち現場局員の使命だ。
- ・貴重なソフトを失ったことを率直に残念に思った。結果として他の企画まで傷ついてしまったように感じる。
- ・常に内なる第三者を作っていかなければ、新たな時代の作り方に対応していけないと思う。
- ・「この番組の根幹は何か」を理解し、番組のルールを共有すれば防ぐことができたはず。
- ・失敗をうまく見せる……柔軟に対応する……口で言うのは簡単。普段から柔軟に対応できる体制を取っていることが大事だ。

#### 【制作体制、コミュニケーションについて】

- ・決定的に“話し合い”が足りていなかった。
- ・定例の全体会議はやはり必要だったと思う。
- ・担務を引き継ぐ場合は(後任の者が)不安に思う点を、前任者がいかに先回りして伝えるかが大切であるということを改めて認識した。
- ・海外のロケ現場では、いくら日本で議論し尽くしても、想像すらしなかったことが平気で起きる。海外からでも躊躇なく相談できるような体制は取れているのか、現場で判断を誤ってしまった場合、それが総合演出やプロデューサーに正直に伝わるような体制は取れているのかなど、改めて考えないといけないと感じた。

・コロナ禍によって、全体会議を開きにくくなった。このことはプロデューサーとしては危機感にもつながる。全体で意思疎通をして番組を制作できているかは疑問。明日は我が身と気を引き締めたい。

#### 【撮れ高に縛られるディレクター】

- ・何を「撮れ高」と考えるかだ。(メキシコロケの日程が)4泊5日という短期間だったことも問題だが、主役は爬虫類ではなく人であるべきだった。
- ・ディレクターの抱えるプレッシャーは、意見書から読み取れるものよりはるかに大きい。「やらせ」と「プレッシャー」は切っても切れない。この点こそ忘れてはいけない本質なのでは？
- ・ドキュメンタリーや自然を相手にする番組は、人間の想像を超え状況が刻々と変化する。結末を変えることができる裁量をディレクターに与えると同時に、視聴者にウソをつかずにVTRを成立させる実力、多くの演出の引き出しを身につけさせる必要がある。

#### <再発防止への提言>

##### 【コミュニケーションと番組コンセプトの共有】

- ・番組としての優先順位は何なのか？ADからプロデューサーに至るまで意思統一されることが一番大事なこと。
- ・情報共有のラインを明確化する必要があると感じた。番組のスタイルによってやり方は違うと思うが、そこが大事だという認識を強く持たねばならないと感じた。
- ・各番組の「越えてはいけない一線」について明確に言葉で伝え、スタッフ全体で共有することが必要。
- ・コミュニケーション不足が様々な問題を引き起こす。対話している中で違和感に気づくものだと思う。何が起きているのかをプロデューサーが全て把握する組織作り、気軽に相談しやすい雰囲気作りが一番大切だ。

##### 【ディレクターにかかるプレッシャーの軽減】

- ・番組として「最低限……があれば番組として大丈夫」という、ロケに出るディレクターが安心する明確な指示は必要。
- ・ディレクターにのしかかるプレッシャーをいかに軽減してやれるかが、再発防止につながると考える。コミュニケーションを通して、その重圧を軽減する。これは現場にいる以上、永遠のテーマであり、永遠の課題。
- ・「撮れた」パターン一択の構成ではなく、「万が一撮れなかった場合」の構成を、ロケディレクターと演出で事前にきちんと打合せし、必要に応じて状況を共有する。そのためには複数パターンのゴールについて話し合える雰囲気にしないといけない。

##### 【プロデューサーや上に立つ人間の役割について】

- ・それぞれの番組内で、「ここまでならやっていい、これ以上はダメ」という線引きを、番組のトップがきちんと明示することが必要だ。
- ・上に立つ者は受け身の姿勢をやめ、常に自身を律してフェアに闘う姿勢を続けること……今後の再発防止への最善の策だと思う。

- ・プロデューサーが内容を把握することは必須。何か問題が起きた時、少なくとも自分が納得して責任を取れる体制にしておきたい。キャスティング・構成案に関して、一人の頭で決めない。
- ・プロデューサーとしては、人員を多く配置して、(問題が起きた時に)企画を先送りできるよう、他のネタを同時に走らせておくこと。意図的に複眼的なシステムを作らなければならない。
- ・権力の集中からくる番組の空気感が最大の悪だ。過剰演出がないか、上に立つ者がしっかり発言していくことで他のスタッフが声を上げやすくなり、報告が上がり、危機回避できる。
- ・プロデューサーは番組内容にブレーキをかけ、ディレクターの行き過ぎた考えや行為に対し、論ず役割を担う。
- ・プロデューサーはロケ内容、演出方法を事前に把握し、隠れた問題に気づく立場であるべき。
- ・総合演出が一人で背負って判断せず、プロデューサーが客観的な目線から関与する。

### 【意識改革】

- ・日本のこれまでのバラエティ番組には「少ない予算と時間の制約の中で必ず面白いものを撮影しなければならない」という圧力のもとに制作されてきたケースがあった。未だにテレビ界はその呪縛から逃れることができていない。「知恵と工夫で、撮れなかったことを含めて面白くみせればいい」という思想を「キレイゴト」ではなく新しい時代のテレビ制作の指針とすることが必要だ。
- ・演出世代に対してもコンプライアンス教育を強化する。コンプライアンスの感覚はプロデューサーだけでなく総合演出にも必須。
- ・SNSの発達に伴い、一億総チェック社会となっている。体制として、“総合演出が決めることがすべて”という考えを捨てること。これが一番。
- ・「テレビ局に蔓延する意識」を改革するのは難しい。社員だけでなく制作会社のスタッフなど幅広い意見の吸い上げが大事。
- ・番組制作をする者全員が社会人として基本的な「責任」「知識」「思考力」「相手への思いやり」等をきちんと身につけられるように具体的な手立てを講じるべき。
- ・「古き良き時代」の人たちは意識改革のための講座を受けるべきだし、新人として入ってくる人たちにもしっかりと伝えていくべき。

### (3) 番組ごとに「演出講座」を開き、「許される演出」「許されない演出」について議論

コンテンツ制作局では制作者の意識向上をはかるため、レギュラーのバラエティ番組ごとに「演出講座」を開きました。社外スタッフを含む番組制作者全員が参加し、プロデューサーや総合演出が中心となって、「許される演出」「許されない演出」とは何か、「なぜ不適切な演出に至ってしまうのか」などについて率直な意見交換を行いました。この「演出講座」により、それぞれの番組が許容できるラインはどこまでかを改めて確認、共有しました。

以下、この「演出講座」で出た本件に関連する主な発言を紹介します。

### 「クレイジージャーニー」での出来事をどう受け止めたか？

- ・捕れるかどうかをメインに持っていったのがアウト。やり方次第でリスク回避できたはず。爬虫類ではなく、この研究者の面白さを見せることにこだわるとか。力点の置き所を間違ったと思う。

- ・ディレクターには「前作を超えていかないといけない」「前よりも面白く」というプレッシャーがあったと思う。自分が担当している番組なら、捕れないけどどうします？と現場から相談が来る。
- ・(もし自分がこの企画の現場ディレクターだったら)どうしても捕まえられない場合は演出にプランBの相談をする。動物園に行って動物紹介に変えるとか。とはいえ時代が違えばやってしまっていたかもしれない。
- ・(もし自分に、現場から「捕獲が難しい」と相談があったら)「捕れなかった」ことを、面白いVTRにできるか、企画自体の変更含め考える。ロケ前に、死ぬほどパターンを考えておかないといけない。海外ロケはほぼその通りにならないのだから。
- ・大事なのは、ディレクターが正直に「撮れない」と、演出やプロデューサーに相談できるかどうか。そういう番組の空気、普段からのコミュニケーションが重要だと思う。

### やらせと受けとられないための工夫

- ・放送では、(外部の人に)どういう状況で協力していただいているのか、テロップやナレーションでフォローや説明を入れるよう配慮する。このフォローの文言には非常に気を配っている。
- ・撮ろうとしたものが撮れなかったら、そのことを笑いに転化するなど、成功したものだけ放送するということはしていない。これは制作者にとって逃げ場ともなり、Dの抱え込みを防いでいる。
- ・タレントではない一般の人が出演する場合、放送によって傷つかないようにフォローすることには相当神経を使っている。

### 撮れ高、ディレクターの孤立

- ・(撮れ高が厳しい時どうする?)構成に無理に合わせようとするから厳しくなる。現場で構成を変えていけるよう、演出と相談しておく。想定から外れることを想定できるかどうか。
- ・死ぬほどパターンを考えておかないと海外ロケはほぼ失敗する。ディレクターはそれを考えておかないとダメだと思う。企画自体を変えるとか、とにかくアイデアをいっぱい持つておく。あとはディレクターの良心。
- ・ディレクターが追い込まれないように。それに尽きる。ディレクターが抱え込んで一人でやってしまうのが一番よくない。みんなで考えればいいのだから。

### 取材対象との関係

- ・出演してもらって一般の人との向き合いには力を尽くしている。「強要された」「無理強いされた」と思われないように。
- ・主人公のキャラクターづけも、本人が嫌がるものはやらない。取材対象が一般の人である場合はさらに要注意。
- ・番組側が出演者との信頼関係を築けていると思っていても、ハラスメントになっていないかなど、引いた眼で慎重に見た方がいい。
- ・取材しておきながら諸般の事情でこちらから(放送を)お断りした人のフォローはとても大事。「せっかく協力したのに」と不快に思われないよう、良い関係性を保つよう心掛けている。
- ・次にまたお願いしやすい関係性で終われることを意識している。

### 3. 「放送倫理委員会」での取り組み

本件がBPO放送倫理検証委員会で審議入りすることが決まった後の2019年10月4日、当社の編成局、法務・コンプライアンス統括室、報道局、コンテンツ制作局、情報制作局、スポーツ局、営業局などの幹部が放送倫理や人権にかかわる問題を社内横断的に討議する「放送倫理委員会」でこの事案を取り上げました。

委員会では実際に放送した番組を上映し、ロケで事前準備が行われた経緯や背景についてコンテンツ制作局から説明、再発防止に向けた議論を行いました。

また、BPO検証委決定通知後の2020年8月7日に開催した委員会では、意見書で指摘を受けたポイントについてコンプライアンス部から説明した上で、コンテンツ制作局から再発防止の取り組みについて改めて報告し、この場での議論を通じ、決定の内容について全社的な周知を行いました。

### 4. BPO放送倫理検証委員会の委員を招いて意見交換会を実施

2020年10月30日、BPO放送倫理検証委員会の長嶋甲兵委員と中野剛委員をお招きし、コンテンツ制作局担当取締役、コンテンツ制作局長、バラエティ制作部長、制作考査部長ほか、コンテンツ制作局の全社員など約100人が参加する意見交換会を開催しました。コロナウイルス感染防止のため、会議アプリを使ったリモート参加を併用した形で行いました。

長嶋委員と中野委員から、意見書のポイントについて改めて解説していただいた上で、「視聴者との約束」「ディレクターの孤立」「番組内での話し合い不足」「プロデューサー・上に立つ者の役割」などをテーマに意見交換を行いました。

長嶋委員からは「報告書作成にあたっては、審議対象の範囲や演出論などについて、委員会の中でも意見が分かれる部分もあり悩んだ」「メキシコロケに充てた日数や人員は足りていなかったのではないかと感じた」といった発言がありました。また、中野委員からは、「BPOの意見書は、あくまで放送局が自主自律的に考えていくための材料と考え、役立てて欲しい。意見書をきっかけに放送局の中で会話がされる、その中で放送倫理が理解され、醸成されていくことを求めている」といった発言がありました。

一方、参加した当社のプロデューサーからは「視聴者との約束は時代とともに変化する。制作者はその変化に柔軟に対応しながら、価値観を共有するべくどう対話するかが課題」「台本通りに撮れるのが撮れ高がいいことだと思っている人が増えつつある。想定外を面白がれるよう想像力を働かせて話し合うことが大事だ」といった発言がありました。

最後に、コンテンツ制作局長からは「今回のことを受けて、番組の方針を話し合う、確認し合う癖をつけていかなければならないと感じている。スタッフ間でもっと会話することで、視聴者が求めているものや時代への感度が醸成されていくべき」との発言がありました。

## 5. 番組審議会への報告

当社の番組審議会では、これまで本件を4回取り上げました。2020年9月14日に開かれた番組審議会では、編成局長が委員会決定の内容と当社の対応について説明し、「取り組むべき課題は多い。決定を真摯に受け止め、引き続き信頼回復に努めていきたい」と報告しました。委員からは「番組の革新性などを高く評価していた番組だったので、このような結果になったことは非常に残念に思う」「よい番組は、そのよいところが、時の経過とともに番組を縛り、固定的にとらえられたその『よさ』を出さなければいけないという制約になってしまったのではないか」「制作サイドの常識、想像力、感覚を多面的に確認しあう場を作り、おごらず、だけど小さくまとまらないこと、そこにテレビの可能性はまだあるのではないか」といったご意見をいただきました。

## 6. 「放送と人権」特別委員会での議論

「放送と人権」特別委員会は当社が外部の有識者を招いて、放送倫理や人権にかかわる問題について意見を求めるもので、非公開で行われています。2019年10月11日に開かれた委員会では、「クレイジージャーニー」「爬虫類ハンター企画」について、様々な観点から議論を行いました。この議論は、問題の本質をより深く理解し、共有する上で有意義なものとなりました。

## 7. 再発防止への取り組み

コンテンツ制作局では、再発防止に向け、以下のような取り組みを始めました。

### **(1) チーフプロデューサー制の導入**

各バラエティ番組に、新たにチーフプロデューサー制を導入しました。チーフプロデューサーは、企画段階の事前考査から責任を持って放送に関与します。また、企画内容、人員配置、スケジュールなど番組の全てを把握し、複眼でチェックを行い、適正さに疑いがあるものは速やかに上長や考査部門と協議し、改善に努めます。

チーフプロデューサー制導入の狙いは、責任の所在を明確化することです。効率に主眼を置いた分業体制は時に盲点を生み、スタッフを孤立させたり、必要不可欠なコミュニケーションが欠けたりするおそれがあります。既存のプロデューサーに加え、番組内容により一層深く関与する立場を設けることでこうした弊害をなくそうというのが主眼です。また、「クレイジージャーニー」が全体会議を持たなかったことの弊害についてはBPO検証委の意見書でもご指摘をいただきましたが、コンテンツ制作局では個々の番組の特性を踏まえつつ、会議の持ち方、情報共有のあり方をより緻密に構築するべく議論を進めています。

## (2) スタッフを孤立させない組織作り

スタッフを孤立させない組織作りを、番組制作に関わる全ての者が本気で目指します。現場スタッフが制作過程で判断に迷ったり、少しでも違和感を覚えたりしたものについては、個々のスタッフが抱え込んで判断せず、別の視点を持つ複数の声を聞いた上で判断することを習慣化します。

## (3) 制作者の知見を高める

プロデューサーだけでなく、すべての番組制作者が、社内で開催している「当事者から学ぶ人権講座」などの勉強会、セミナーに積極的に出席し、知見を高め、刻々とアップデートされる倫理規範について理解を深めるため、不断の努力をします。

「許される演出」と「許されない演出」について明確な線引きをすることは簡単なことではありません。本件を受けて番組単位で開いた演出講座でも議論百出で、正解はここにあるのだと、結論をきれいに集約できるものではありませんでした。ただ、自分たちが担当する番組が踏み越えてはならない一線は一体どこにあるのか、自分たちの番組が視聴者と結んでいる約束とは何なのか、直近の放送の中に危ういものはなかったか、番組スタッフが互いの間の壁を取っ払って会話を続け、探り合い、確認し続けることこそが何にも勝るリスク回避策なのだろうと、今回の件を振り返る中で、思いを強くしています。

また、個々の制作者の感覚、常識、モラルが、今の時代を生きる視聴者のそれと乖離しないよう、どれだけ機敏にアップデートしていけるか、今回のケースを含む過去の不適切な事例を折に触れて振り返り、どこに問題があったのか再確認し、一人ひとりの意識の中にしっかりと植えつけることも必要不可欠です。このために必要な勉強会、セミナー等も継続して開催したいと考えています。今後とも、再発防止策の効果を点検し、必要な改善をはかってまいります。

## 8. 総括

「クレイジージャーニー」は、2015年に深夜の特別番組として放送を開始して以来、地道に支持の幅を拡げ、たくさんの視聴者に楽しんでいただける番組に育ちつつありました。ところが今回の不適切な取材手法によって、視聴者のみなさまを裏切ってしまったことから番組を終了せざるを得ず、今後も番組を楽しみにしていた多くの視聴者の期待に応えられなくなってしまったこと、番組にご出演、ご協力いただいていた方々の期待に応えられなくなったことは、私どもとしては慚愧に堪えません。

BPO検証委決定の後、私どもが実施したバラエティ番組のプロデューサーを対象としたアンケートでは、再発防止のための様々な具体的提言が上がってきました。スタッフ間のコミュニケーションや情報共有の在り方の見直し、マイナス情報が報告される健全な空気の醸成、最前線の現場を孤立させない組織作り、上に立つ者に求められる姿勢や意識改革など、本件をきっかけとして、当社のバラエティ改革の取り組みは既に動き出しています。

私どもは、このたびBPO放送倫理検証委員会の意見書、そして委員との意見交換を通じて、当該番組スタッフのみならず、当社の番組制作に関わる多くの者が、様々な立場で新たに考え始める数々のヒントをいただいたと受け止めています。



意見書は最後に「『クレイジージャーニー』から始まる改革」として、「放送終了を最も残念に思ったのは、『88人のジャーニーたち』だったかもしれない」「ジャーニーたちのこだわりや情熱は、むしろ、放送に関わる人間に求められるものではないだろうか」と指摘しました。また、「コロナ禍の逆境を真摯に深く受け止め、組織の仕組みやコンテンツが、より良い方向に変わるチャンスととらえ、それをきっかけに、新たな制作スタイルや番組を創造することの意義を考える。そうした試行錯誤から、本当の『作り方改革』は始まるはずである」と、現下の厳しい状況で煩悶しながらも全力を尽くして番組作りに挑む制作者を励ますメッセージで締めくくられています。こうしたメッセージに応えるためにも、当社では、番組にご協力いただく出演者や関係者、そして視聴者のみなさまと信頼関係を築き上げられるよう一層の努力を重ね、より多くの視聴者に安心して楽しんでいただける番組作りに取り組んでまいります。

以上